

赤井川村

1333 西紗弥香

1. 概要と歴史

1.1 名前の由来

赤井川村名は、アイヌ語「フレ・ペツ」に由来し、「赤い川」を意味している。

1.2 村章

1968 年 6 月 10 日に制定されたもの。中の菱形は、赤井川村の赤を図案化したものであり、また、整然と区画された八つの形は近代的農業の限りない発展を意味している。外形の円は、独特の盆地に囲まれた赤井川村の平和と団結を象徴したもの。菱形の緑は、近代的農業を意味し、外形の赤は村民の団結と協調により輝かしい未来を築かんとするエネルギーを象徴するものである。

図 1 赤井川村の村章



出典：赤井川村 HP

1.3 村の木・花

赤井川村の村の木はシラカバである。シラカバは「白皮」が語源とされるカバノキ科の落葉樹高木だ。本州中部以北から北海道にかけて分布している。幹に特徴があり白色で薄く紙状に剥がれ、生乾きでも枝とともによく燃える。「ガンビ」とも呼ばれる。赤井川村ではどの地域でもよく見られる一般的な木で、村の美しい風景を形成するのに欠くことのできない木である。

また、赤井川村の村の花はムラサキヤシオである。低山帯上部から亜高山帯の林縁や雪渓の縁など湿り気の多い所に生える高さ 1 から 3m の落葉低木で、直径 3 から 4cm の濃紅紫色の花を咲かせる。花期は 5 から 6 月で、近畿以北で見られる。赤井川村では一部の山裾でしか見られない貴重な植物である。

図 2 村の木 シラカバ



出典：赤井川村 HP

図 3 村の花 ムラサキヤシオ



出典：赤井川村 HP

1.4 歴史

1888 年（明治 21 年）新潟県人長谷川友太郎が、その頃既に、鉱石を運搬する道がついていたことから無願開拓の形で山道地区に入っていた。一町二～三反を耕し、炭焼きを行い生活していたというが、後に入植した人々とともに山道団体として開拓にあたった。1893 年（明治 26 年）に余市郡の林長左衛門・栗屋貞一らが余市開墾株式会社により貸し付けを受け開拓を始め、この頃から移住者が増えてきたが、ほとんどがこの会社の小作人であった。実際、大江村を開拓していた愛媛からの移住者が、大江村の開祖、栗屋が赤井川に入る事を聞き、新たな開拓地を求めて入地、その中の榎本三造が愛媛に、大西佐忠蔵が香川に赴き、移住者を募集し、さらに 1896 年（明治 29 年）に入地している。

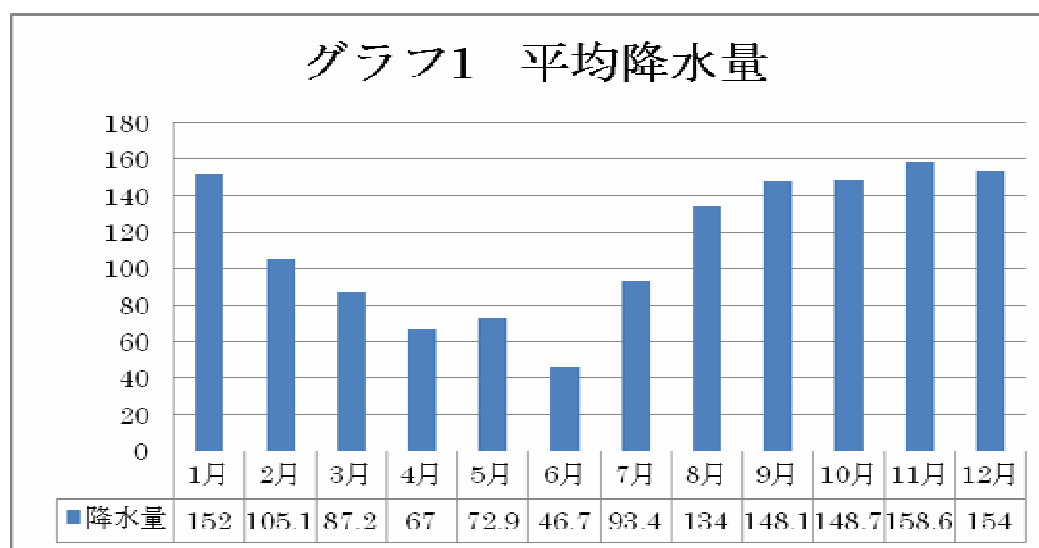
1877 年（明治 10 年）に明治鉱山が発見され、1889 年（明治 22 年）にも中ノ沢鉱山が、その後轟鉱山も発見され、各々操業を始め、1936 年（昭和 11 年）松倉鉱山も稼働したが、今はいずれも閉山及び、休山している。

1899 年（明治 32 年）に余市郡大江村（現：仁木町）より分村し、赤井川戸長役場を設置する。1906 年（明治 39 年）4 月 1 日に、小樽支庁から後志支庁へ変遷する。それと同時に二級町村制を施行により赤井川村と称し、現在に至っている。

2. 気候・地理

2.1 気候

気候は、高台盆地特有の気候を呈し、夏には最高気温が 30 を超える半面、冬には最低気温が - 20 以下まで低下する。また、降雨量・降水量は夏場に極端に少なくなる傾向にあり、昼夜の気温差（寒暖差）も大きくなっている。このような地勢、気象から農作物が早霜・晩霜に悩まされるという特徴がある。



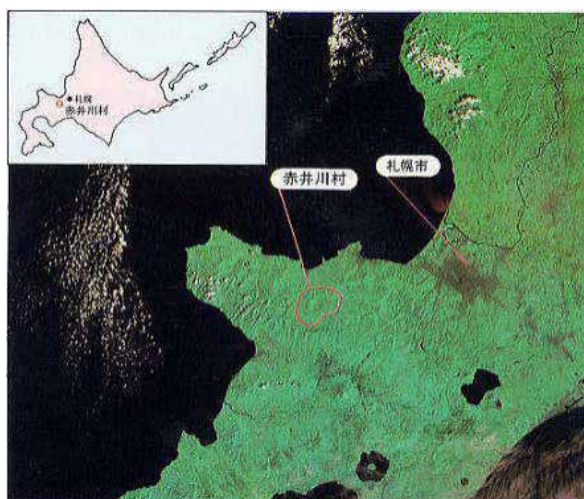
出典：気象庁 HP

2.2 地理

北緯 43 度 04 分 52 秒、東経 140 度 49 分 01 秒、標高 138.28m に位置する。面積は 280.11 平方 km である。

小樽川・白井川・余市川の流れる余市川流域地帯と西側の赤井川流域の 2 つの流域からなっている。特に赤井川流域の大半が平坦地や緩い傾斜地であり、農用地・宅地に利用されている。また、周辺を山々に囲まれた形状をなしていることから「カルデラ盆地」と呼ばれている。

図 4 赤井川村の位置



出典：赤井川村 HP

図 5 赤井川村の位置



出典：わがマチわがムラ

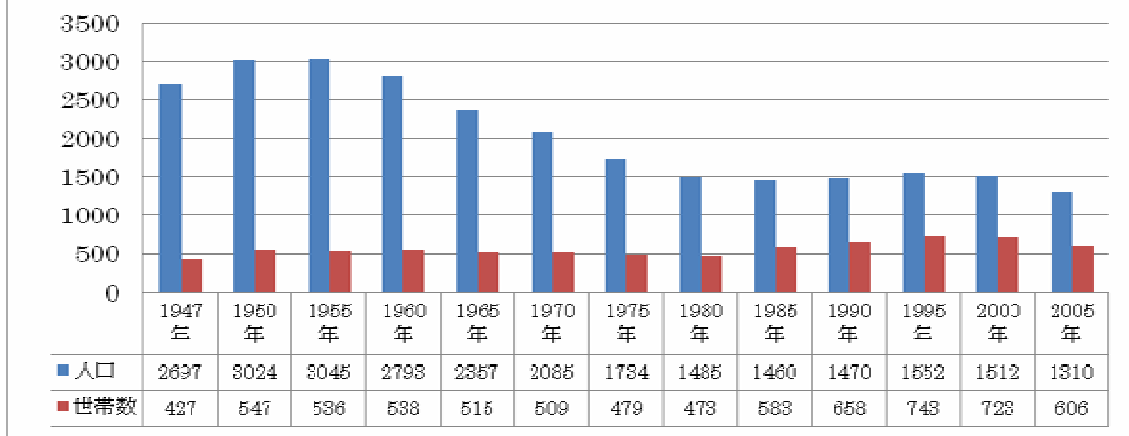
3. 人口・世帯数推移

国勢調査によると、赤井川村の人口は 1955 年まで上昇傾向にあったが、その後急激な減少をはじめた。1985 年に再び緩やかに上昇しはじめ 1995 年には一時的に上昇したが、2000 年から減少してしまっている。この 1995 年の一時的な増加は、リゾート開発が原因である。

「カルデラの味覚まつり」の開催、「赤井川温泉」の開発、「キロロリゾート」の開発などによる赤井川村の内発的発達により、一時的に人口が増加したのだと考えられる。一方、赤井川村の世帯数は、1960 年までは上昇していたがそこから下降し、1985 年に再び上昇するが、2005 年には再び減少している。しかし、人口の推移に比べ、大きな変化は見られない。

このグラフから推測すると、赤井川村では少子化、過疎化がおこっていることが予想できる。それは 1950 年代後半から始まり、現在ではその現象は多少落ち着いたように見える。また、世帯数に人口の推移ほどの変化が見られないことから、赤井川村では一世帯数構成員が少なくなっている、つまり核家族化が進んでいることがわかる。さらに同時に、少子化や若者の都市への流出により、高齢者のみの世帯の増加が進んでいる事も予想できる。

グラフ2 人口・世帯数推移



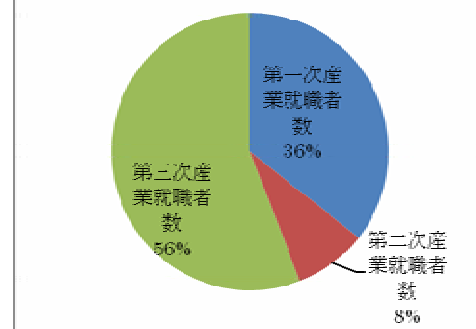
出典：国勢調査

4. 産業

4.1 産業別人口

産業別人口を見てみると、第一次産業就職者は269人、第二次産業就職者が64人、第三次産業就職者数が421人となっている。この数字を見ると、赤井川村では第三次産業の割合が高く、産業の主体となっている事がわかる。これは、赤井川村では観光業が盛んであるためであるといえる。また第一次産業の割合も比較的高く、農業も盛んであることが読み取れる。逆に第二次産業は全体の8%と極端に少ないことも特徴である。

グラフ3 産業別人口割合

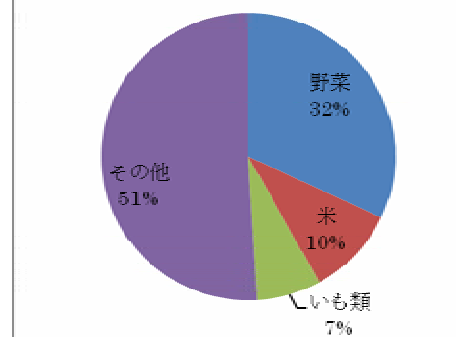


出典：国勢調査(2005年)

4.2 農業

赤井川村の産物の品目は多岐にわたり、北海道で栽培できる農産物は何でも出来るといわれている(作付面積が多い品目は、米、馬鈴薯、南瓜、スイートコーンなど)。農業産出額の合計は150千万円で、その具体的な内訳は、野菜が48千万円で全体の32%、米が15千万円で全体の10%、いも類が10千万円で7%、残りが51%である。その他の51%には、果実(1千万円)、花き(3千万円)、乳用牛(6千万円)、うち生乳(5千万円)などが含まれる。

グラフ4 農業産出額内訳



出典：生産農業所得統計(2005年)

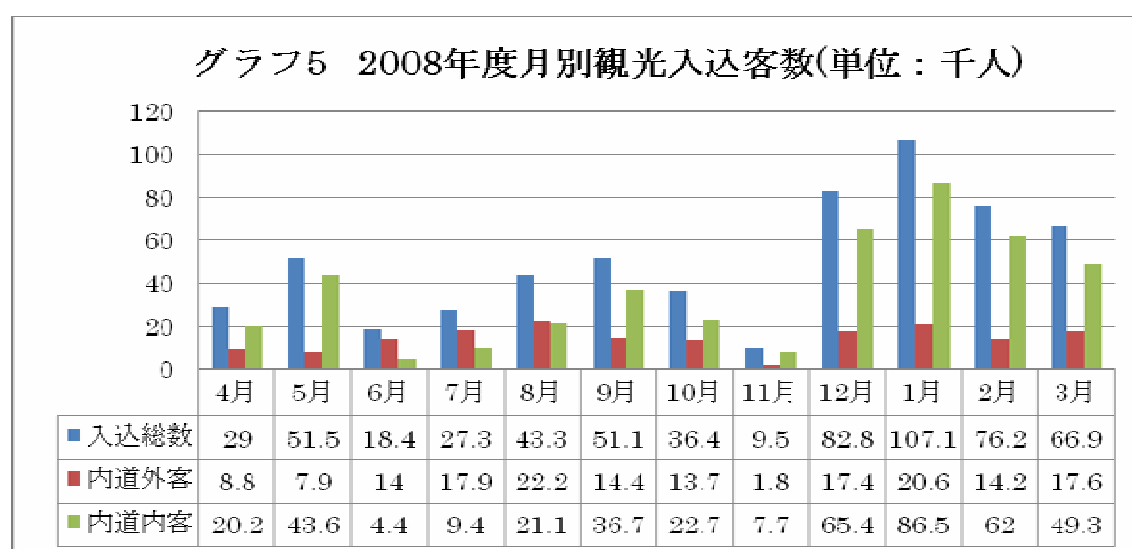
4.3 特産物

赤井川村の特産物としてあげられるのは、じゃがいも、かぼちゃ、カルデラメロン、スイートコーン、グリーンアスパラガス、カルデラ木炭などである。乾燥した空気と、昼夜の温度差が大きいカルデラ盆地特有の気候が作り出すじゃがいもやかぼちゃは、良質のでんぷん質で甘みがあり、また、道内の中でも土壌が肥えた土地であるために、でんぷん質が多く、糖度と甘みが強いと評価されている。また赤井川村は大規模な火山活動によって生じた大地のくぼみ（カルデラ盆地）であり、その特徴である火山灰質の土壌はメロンの栽培に大切な水はけの良さを持っている。また、昼夜の温度差が激しい盆地特有の気候もメロンの甘みを高めている。スイカやトウモロコシの甘みや、イチゴやアスパラガスのみずみずしさを生み出しているのも、カルデラ盆地特有の昼夜の寒暖差であり、この特有の寒暖差が、赤井川村が農産王国と言われる由縁である。

5. 観光

5.1 観光客数

赤井川村には冬を中心に多くの観光客が訪れている。このことから、赤井川村は北海道では少ない冬型の観光地であるということがわかる。観光客の中心は道内の人々である。2008年度の年間入込総数は599,500人であり、2007年度の年間入込総数の389,300人を大きく上回った。1991年にはスキー場を中心としたキロロリゾートがオープンし、冬期間のウィンタースポーツだけでなく、テニス、パークゴルフ、トレッキング、ファンカヤック、パラグライダーなど夏期アウトドアレジャーの観光客も増えている。また、一般国道393号の開通により、広域観光の連携が期待されている。今後は、さらに観光客を増やしていくために、道外へのアピールにも重点を置いていくべきであろう。



出典：北海道観光入込客数調査報告書(2008年)

5.2 アリス・ファーム

アリス・ファームは、名前の通り、農業を基礎とする団体で、30年にわたって暮らしに関わる多方面のものづくりをしてきた。自給用、営業用の農業と食品加工を中心に活動をしている店舗での製品の販売、夏期はブルーベリー園が開放されピクニック気分で行くことができる。

図6 アリス・ファーム



5.3 キロロ・スノーワールド

キロロ・スノーワールドは北海道余市郡赤井川村にあるキロロリゾートのスキー場部分の名称である。1991年オープンと、スキー場としては比較的新しく、リフトも高速リフトメインとなっている。朝里岳を中心にビッグスケールのスキー場を展開している。豪雪地帯として知られるエリアだけに、雪の量、質ともに申し分ない。あまりに雪の日が多く驚くかもしれないが、しかし、それは常に新雪・深雪を満喫できる恵まれた環境にあるからこそである。ゲレンデスキー以外の遊びの充実度も高く、「スノーシューウォーキング」など、自然体験要素の高いアクティビティが豊富だ。

図7 キロロ・スノーワールド



出典：赤井川村 HP

5.4 キロロ温泉「森林の湯」

キロロ温泉「森林の湯」はホテルピアノキロロタウンの中にある。アクティブに体を動かした後に気持ちよく汗を流すのにぴったりである。赤井川村から湧き出た天然温泉は、岩造りの露天風呂で風情があり、雄大な森を眺めながら温まる事ができる。内風呂には寝湯や水風呂・ドライサウナ・ミストサウナがあり、ゆったり、のんびりくつろげる。リラクゼーションルームで休んだり、浪越指圧センターで体をほぐしたり、リゾート気分も味わえる。

図8 キロロ温泉「森林の湯」



出典：赤井川村 HP

参考ホームページ

赤井川村：<http://www.akaigawa.com/index.htm>

Wikipedia：<http://ja.wikipedia.org/wiki/>

わがマチわがムラ：<http://www.machimura.maff.go.jp/>

北海道庁：<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/>

気象庁：<http://www.jma.go.jp/jma/index.html>